

生活部会

< 県研究主題 >

具体的な活動や体験を通して気付きの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 西浦 幸世 (県央地区)

< 研究主題 >

「進んで学び、自分の思いを表現する子どもの育成

～子どもの思い・願いを生かし、気付きの質を高める授業づくり～」

1 提案内容

子どもたちの思いや願いを満たすためには、体験活動をより一層充実させなければならないと思い、研究を進めることとした。

(1) テーマについて

テーマには、“進んで学ぶ”子ども、“自分の思いを表現する”子どもと二つの子ども姿がある。“進んで学ぶ子ども”を“課題意識をもった子ども”、“自分の思いを表現する子ども”を“伝えたい・教えたい・見せたい子ども”とし、それぞれに応じた手立てを考えた。

(2) テーマに迫るための手立て

① 課題意識をもった子どもを育てるために

ア 「なぜ?」「どうして?」と思えるような単元導入

「不思議を知りたい」「どうなっているんだろう」という疑問や探究心を培うことで自ら進んで学ぼうとする気持ちを育てたいと考えた。

イ 具体的な活動・体験が十分にできる場の設定

繰り返し活動を保証することで、子どもたちは新たに気付いたことを活動の中で生かし、思いや願いがどんどん生まれ、試したいことが多くなってくる。そのため場の設定や時間の確保をすることが大切だと考えた。

② “伝えたい・教えたい・見せたい子ども”を育てるために

ア 表現記録しやすいワークシートの工夫

活動の中での驚きや発見、失敗したことなどを明確にするために、ワークシートを活用する。その内容を相手に伝えることで、さらに気付きが自覚されると考えた。

イ 活動したことを振り返り、表現する時間を設け、伝え合い交流する場の設定

全体で共有することで、新たに思いや願いが生まれると考え、伝え合う時間を設定する。子どもたちが交流しやすい様に、広げすぎず、狭めすぎず、目指すところを絞っていこうと考えた。

(3) 授業実践 単元名「うごく うごく わたしのおもちゃ」(12時間扱い)

① 成果

○ 導入で、子どもが興味を持てるような投げかけができ、その後の子どもたちの取り組む姿が生き生きとしていた。飛行機の活動では、自分から考えて工夫したり、友だち

の工夫を比べたりしながら楽しそうに取り組んでいた。

- 活動時間を保証し、様々な気付きが生まれるようにし、試しながら活動できる場を設定することで、子どもたちは試行錯誤しながら取り組めた。
- 工夫した箇所を書き込むことを必要最小限に抑えたワークシートにより、教師側もどんな工夫をしたのか把握しやすかった。
- 子どもたちの思いや願いを伝える場を設定したことで様々な見方や考え方を伝え合い、一つの疑問に対し、みんなで考えることができた。

②課題

- 1時間の中で何を目的としてやっているのか明確にし、子どももそれを意識して活動できるように工夫する必要がある。
- ワークシート以外に子どもの意見やふとした気付きについて見取る方法を検討していく必要がある

2 協議内容

(1) 提案内容についての質問・意見

①試行錯誤中の子どもへの言葉かけは、どのようにしたか。

⇒成功した子に対する周りの子どもたちの評価を、他の子たちにも知らせるよう声をかけた。加えて、子どもたちの気持ちを盛り上げる言葉を意識してかけた。

②ワークシートは、提案された一種類のみか。他のことを書きたい子どもはいなかったか。

⇒使用したワークシートは1つのみ。その分、自由度を高くし、子どもたちが思いついたことを書けるようにした。

③飛行機のおもりとして粘土以外のものをつけたい子どもはいなかったか。

⇒子どもたちがいろいろな材料を試した中で、調整しやすい粘土になっていった。

④全員が工作用紙とストローを使った飛行機を作る活動としたのはなぜか。

⇒実践を振り返る中では、もっといろいろなものを作る活動とする方法も考えられた。

⑤子どもたちが紙飛行機づくりからストローを使った飛行機づくりへと移行した経緯はどのようなものか。

⇒紙飛行機があまり飛ばないことに気付いた子どもたちが「もっと大きな翼をつけて、もっと飛ぶものを作りたい」といった思いをもち、ストローを使った飛行機作りへと移行していった。一年生の時のコマ作りの経験が生かされている。

3 まとめ

○生活科の目標の構成をしっかりとおさえる。

(1) 具体的な活動や体験を通して

(2) 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち

(3) 自分自身や自分の生活について考えさせるとともに

(4) 生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ

(5) 自立への基礎を養う

○遊びの中に生活科の目標につながるものがある。

○見取る力の前に、何を見取るかをはっきりさせる。

○子どもとの対話を重視し、一緒におもしろがる姿勢、探究する姿勢が児童理解を深める。

< 研究主題 >

子どもが満足感・成就感を味わえる授業の工夫

— 「ようこう台の町の『名人』をつたえ合おう！」の学習を通して —

1 提案内容

児童が教師からのビデオレターで大船渡の「名人」を知ることをきっかけに、自分たちの町である陽光台の町にはどんな「名人」がいるかを考え、町探検を通して、自分なりに見つけた「名人」について調べ、「名人」のよさや「名人」がたくさんいるということを知り、「？」が「！」になるように学習を進めた。そして、互いに見つけた「名人」を伝え合う活動を通して、自分たちの町のよさに気付いたり、町への親しみや愛着をもち、人々と適切に接したりすることができることを目標に研究を進めていった。

(1) テーマについて

① 「満足感・成就感」とは

子どもたちが主体的に活動し、自分の思いや願いが実現できたとき、満足感が生まれる。それは、活動が単なる「楽しかった」という思いだけでなく、「～が良かった」という喜びが子どもの言葉や行動の変容等で現れるものである。

また、様々な人との交流活動や気付きの質が高まる連続的な活動を通して、自分自身の成長に気付いたとき、成就感が生まれる。それは、「〇〇を知ることができた」や「〇〇ができるようになった」「〇〇を頑張った」などが子どもの言葉や行動の変容等で表れるものである。

② 「名人」の捉え

本単元での「名人」を、広義で「何かに優れた人、または評判の高い人」とする。

本単元では、人との触れ合いに焦点をあてて学習を進めていくので、子どもたちが「名人」と考える人たちは、

(

- ・やさしく教えてくれる人
- ・きれいにしている人
- ・安全を見守ってくれている人
- ・特技をもっている人

)
 などが挙げられる。

(2) テーマに迫るための手立て

① 子どもの意欲を高め、思いや願いを大切にし、主体的に学習活動に取り組めるようにする。

○ きっかけ（出会わせ方）を大切にする。

○ 「『？』が『！』になる活動（＝問題解決的な学習）」を展開し、自分の「？」をインタビュー活動や観察などを通して「！」にできるようにする。

○ 人との触れ合いを大切に活動を繰り返し行う。

○ 活動の流れと子どもの思考の流れを共有できるようにする。

② 進んで伝え合い交流することができるようにする。

○ 自分の考えをカードにまとめさせる。

○ 交流の良さを示せるよう、振り返りのワークシートを準備する。

③ 多様な表現の場を設定し、子どもの気付きが質的に高まるようにする。

○ 多様な表現を取り入れる。

2 協議内容

- ・きっかけづくりに工夫がある。名人に会う時に、どのように名人に会いに行ったのか。また、その時の子どもの思いはどうだったか。

→ビデオレターを見てから1週間たってからの活動だったので、見つけた名人をカードに書いて、教室に掲示した。最初は、「会いたい」「?を!にさせたい」という子どもの思いを大切にしました。また、保護者の方に投げかけたところ、地域の方や保護者の方がたくさん協力してくださり、各グループに一人付いていただくことができた。その間教員は自転車で様々なグループのところをまわった。

- ・その後の子どもの様子や名人とのかかわりはどうなったか。

→子どもからは「ぼくはあんぜんをまもりたいです。見まもり名人がいるからあんぜんにらせるんだなと思いました。」という感想を聞くことができた。また、保護者からは「町を歩いていると、子どもたちから声をかけてくれるのでうれしい。」という言葉をもらうことができた。

3 まとめ「一人ひとりの見取りについて」

(1) 「気付き」とは

学習のねらいに直接関係ない児童の気付きを否定しない。否定してしまうと子どもの楽しさが続かない。気付きの質を高めるには、子どもの気付きや感動に教師も感動することが大切である。

(2) 見取り

全体と一人ひとりの視点でどのような手立てが必要かを考えることが大切である。自己評価や総合評価だけで「できた」とすることはできない。発表やワークシート（文章や絵）だけで評価するのではなく、具体的な姿を見ることが大切である。

4 協議の柱に即した協議（グループ協議）

協議の柱：「子どもの姿を適切に見取り、気付きの質を高める指導の工夫」

(1) グループ協議の報告

- ・グループを決め、普段見落としがちの子をよく見てあげる。グループ別、タイプ別で「今日はこの子」と決めて見る方法もある。
- ・生活科の時間だけではなく、休み時間など学校生活全体で児童の変容を見ていくこともできる。
- ・ワークシートの記述とともに、活動を重視する。児童のつぶやきにも耳を傾ける。
- ・児童の考えに共感することが、気付きの質を高めるためには有効ではないだろうか。
- ・教師の言葉かけが大切である。また、何をもって気付きの質が高まったかということをおさえることが大切である。
- ・個人→グループ→全体で伝え合うことが大切なのではないか。
- ・教師の思いは必要だが、教師の流れにのせるのではなく、多様な考えが出せ、お互いを認め合える場を設定する。

(2) 助言

- ・生活科とは子どもの思いや願いを大切にす教科である、と改めて認識することのできた実践であった。子どもとの対話や授業者の問いかけを大切にする。
- ・活動のねらいが明確になったら、評価の視点が明確になる。多様な活動の中で子どもの姿を適切に見取るには、予測される子どもの姿を想定しておくことも有効である。子どものいつもが見えると変化が見えてくる。